

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が間もなく開幕する。天理参考館は、天理図書館と共に創立90周年を迎える2020年に、併せて日本でのオリンピック開催を記念する意味を込めて、スポーツの歴史と文化を繙く特別展「スポーツの歴史と文化」(以下、スポーツ展)を開催した。残念ながら、東京オリンピックは新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響を受けて1年延期となった。クーベルタン男爵が唱えたオリンピックの精神、「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページより)を体現するため、安全かつ平穏だが、心揺さぶられる感動的な大会となることを願ってやまない。

以前ここでは、スポーツ展に関連した内容として、「走る」に着目して世界各地の生活文化資料と民族スポーツを絡めて述べてきた(本稿(20)～(22))。今回から複数回にわたって、「球技」を取り上げたい。ボールを足で操作するフットボールは、今日最も注目を集めるスポーツである。そのなかでも、まず頭に浮かぶのはサッカーだろう。足より格段に多才な手の使用を全く認めない(ゴールキーパー以外)この球技が、世界最高の人気スポーツであるのは大変興味深い。ものを扱うのに、手よりも不器用な足を操作の主たる手段にすることで、難しさと同時に面白さを追求したかったのか。確かに、足を手以上に自在にコントロールできるプレーヤーの神業は見る者の心を高揚させる。

サッカーだけではない。世界各地に多様な球技が古来存在する。日本に限っても、明治期以降、野球、テニス、ゴルフなど、欧米育ちの球技を愛好、熱狂してきた。私は、日本人は大の球技好きだと思っている。しかしながら、日本の「伝統」スポーツといえば、柔道、剣道、合気道などの武道系か、相撲とされるのが一般的だ。誤解を恐れず言うなら、それらは戦闘系の格闘技である。果たして私たちの先祖は、本当にそれらを「伝統」的に親しんできたのか、それを検証してみたい。儀礼や戦闘など、ある意味「生き死に」に関わるのではない、楽しみという面に焦点を当てるならば、私は球技が「伝統」スポーツだと考えている。そもそもスポーツ「sports」は古代ローマ人が使用したラテン語「deportare」を語源としている。「気晴らしをする」「遊ぶ、楽しむ」という意味である。「祈る」「狩りをする」「戦う」ことではない。スポーツは優劣を競う以外に、楽しさに夢中になって、神や自然と一体になることも目的の一つだ。それゆえに、祝祭行事と結びついたスポーツも多い。要するに私が言いたいのは、日本の「伝統」スポーツは球技の蹴鞠ではないかということである。これをこれから順序立てて説明していきたい。

「伝統」というなら、古さの一つの価値基準になる。蹴鞠の初出は、『日本書紀』皇極紀3年(644)正月朔、法興寺槻木の下でおこなわれた「打毬」という記載である。中大兄皇子の沓が脱げ、中臣鎌子がそれを拾い上げて恭しく捧げたという、二人の有名な出会いのシーンだ。これは大化の改新への幕開

けであり、以後日本史上で綿々と続いていく藤原氏の栄光の第一歩といえる。気の毒なのは、己が創建した最先端の仏教寺院で催したスポーツが、破滅への契機となった蘇我氏であるが。それはともかく、この「打毬」が蹴鞠なのか打毬なのか、いまだ判然としていない。打毬でも沓は脱げるだろうが、寺院の敷地内で騎乗するか、もしくは騎乗せずに毬を打ち合うかを考えたとき、私は現在のような足で鞠を蹴り上げる蹴鞠に軍配を上げたいのである。

対する「伝統」スポーツの相撲の初出は、天平6年(734)7月7日聖武天皇が七夕の歌会に併せて相撲節会すまいのせちえを催したとの記述である。全国から選ばれし力自慢の力士が聖武天皇の御前で取り組みをおこない、以後その年の農作物の収穫を占う宮廷儀式となり、300年余続いた。しかしその後衰退し、承安4年(1174)高倉天皇の治世におそらく平清盛の力で復活したのを最後に、宮中行事としての幕を下ろした。もっとも、東北地方や関東から九州にかけて広範囲にわたって、5世紀から6世紀末の古墳から力士埴輪が出土している。それらは裸に廻し姿だったり、四股を踏む様子が表現されていて躍動的だ。スポーツと定義できるかどうかは別として、古墳時代には相撲は存在していたのだろう。そして、競馬くらべうまや弓道くわみちにつながる騎射もある。競馬は馬が駆ける速さ、乗り手の手綱さばきや礼法を競うもので、古来神事としても伝わっている。『日本書紀』天武紀8年(679)には、良馬の駿足を鑑賞するために天皇の前で走り比べをおこなったという記事が見られるが、これとても蹴鞠よりは少々時代が下がる。なかんずく柔道は、明治15年(1882)に嘉納治五郎によって創始された武道ではないか。もちろんそれまでに武士の組み討ちが存在し、12世紀以降「武芸十八般」と称される合戦時の技芸である武芸が成立している。江戸時代に、そのなかから武術の一つとして発展したのが柔術である。嘉納がその柔術から危険な技を排除することで、武道としての柔道を確立させた功績は大きい。

どうだろうか。やや我田引水な論法ではあるが、記録という点では確かに蹴鞠が古いのである。しかも「戦い」ではない。ただし、蹴鞠は中国から伝来したスポーツで、純粋日本産ではない。しかしながら、次回で説明を加えるが、中国でも、朝鮮半島でも、蹴鞠は軍事訓練の一つだったのである。非常に激しい競技で、映画「レッドクリフ」の冒頭シーンを思い出していただくとよいだろう。それがなぜ現在に伝わるような優雅な所作に変容したのか。そこに、日本人のスポーツ観に基づく選択が働いたと私は考えている。私たちの心をとらえて離さない球技、その魅力について引き続き迫っていきたい。



南都法興寺蹴鞠図 嘉永6年 天理図書館蔵
江戸時代に描かれたもので、古代の服装にはなっていない。皇子と鎌子(すま)を指さし嘲笑する人物(図左下)が蘇我入鹿。